NY エッセイ 76

中瀬有紀

# 自然光の中で




大雪のあとの空

今年前半のニューヨークは昨年に比べて雪がたくさん降ったような気がします。霙まじりの雨や風に舞う程度の雪だけではなく、ふわふわボリュームのある確実に積もる雪が一日中降る大雪の日が何回かありました。ニューヨークは雨よりも雪に強いようで、そんな大雪の日でも電車は大体普通に走りますし、除雪車が走行した後の車道ではスノータイヤを装着していない自動車が何もなかったかのように走っています。ただし、除雪車が間に合わないほどの勢いで雪が降り続いている高速道路を、普通タイヤの二輪駆動で走行中に滑って車ごと360度回転した私は、今後、大雪予報のある日に現場に出向く仕事が入っている場合、前日までに仕事現場近くまで行って宿泊するようにしようと決めました。ニューヨーク周辺の自然環境にはいつも圧倒されます。

マンハッタンから30分ほど車で走るとそこには深い緑の森が広がり、ハドゾン川沿いの断崖絶壁はいつ見ても迫力があります。大雪が過ぎ去った翌朝 、静かな冬枯れの朝の森では、真っ白い新雪の絨毯に残された動物たちのリズミカルな足跡が賑やかさを演出します。いつもは隠れている動物たちが、森に出て朝ごはんを探していたようです。男の人の足跡より大きな跡が一直線に並んでいたのは、兎だと聞きました。足跡、というより体跡ですね。リスはマンハッタンでも頻繁に見られますが、鹿や兎、ウッドチャックはニューヨーク周辺の森に住んでいます。

雪が深いグレイ・スケールの風景で一番息を飲むのは、空の色と空が染める雪の色です。空の色は毎日違いますが、雪が積もっているときによく見るのはピンク色の夜明けです。ロングアイランドに住んでいた頃、朝5時、空が群青色になりかけたくらいに家を出て、車で30分ほど走ったところにある海岸に朝日をよく見に行きました。ファイヤー島との隙間の海が凍っていて、ピンク色の空が氷に映り込み、まるで万華鏡の中に入り込んだような朝焼けを体験したのも、雪景色の朝でした。また、月の出ない夜に透き通った空気が見せる満点の星空の下では、星たちの光が雪をふわっと照らし、真っ暗なはずの森がぼんやり浮かび上がります。雪は私にとって空の色を一つ一つ分解して見せてくれる教材のようです。

もう一つ、マンハッタンの醍醐味は渡り鳥観察でしょう。ニューヨークは渡り鳥の進路に位置するので、多くの人気種が訪れます。特にハミングバードやボルチモア・ムクドリモドキ、そしてスカーレット・ターネンジャーが人気で、有志の鳥専門写真クラブが存在するほどです。ただ、そんな渡り鳥たちを残念ながら照明が傷つけてしまったことがあります。それはニューヨーク9/11メモリアルの光の塔です。渡り鳥は光を指標の一つとしているためか、夜の暗闇の中で88台の7kwスペースキャノンが魅せる光の束に入り込み、方向感覚を失って命が果てるまで一晩中飛び続けます。たくさんの鳥の死骸が灯体近くに横たわっているのを見た関係者は、その翌年からある一定時間に一度光の塔を消灯し、鳥たちを逃すようにしたと聞きました。それでも毎年メモリアルの光の塔の近くに行くと、中でひしめき合って飛んでいる多くの鳥たちがきらきら光っているのが見えます。人間が作り出す光が自然と共存するのはなかなか難しい課題かもしれません。